

# 中国内モンゴル自治区の民族言語教育が抱える課題 —英語教育必修化に伴う言語教育の変容に着目して—

ゴイハン  
高友哈（お茶の水女子大学大学院）

## 1. はじめに

中国では、1980年代の改革・開放政策に始まる一連の市場主義導入以来、産業化が進行し、国際的な市場競争に参入するための英語教育の必要性が高まっている。このような背景の中、少数民族教育においても2001年に英語教育が必修化された。バイリンガル教育の困難と矛盾が指摘されて久しいが、英語教育導入に伴いトライリンガル教育を実施することになる少数民族教育においては、中国語による教育を受けているマジョリティ集団以上に、多言語教育に伴う困難が予想され、英語教育導入以後の少数民族教育における変化やその教育効果、問題点などの整理が急務である。本研究では、言語テストの結果分析とインタビュー調査の分析を行い、英語教育導入以後の少数民族教育における変化やその課題などを調べ、グローバル時代における民族教育のあり方の検討に貢献することを目的とする。

## 2. 中国における英語教育の現状

中国において初めて英語教育が行われたのは、中国初の外国語学校が開設された1862年のことである。その後、中華人民共和国が建国されるまで、英語教育は都市部の一部の学校において実施してきた。建国後は、社会主义体制となったため、外国語教育の中ではロシア語教育が盛んに行われたが、1958年からは科学技術を習得する

手段として都市部の中等学校に限り、英語教育を復活させることになった。文化大革命期には外国語の使用が厳しく制限されたため、英語教育は行われなかつたが、文化大革命の終了と共に改革開放政策が導入されたことをきっかけに、英語教育は急速に普及していくこととなつた。1980年代には上海・天津・北京の三つの直轄市が相次いで初等教育課程に英語教育を導入し、その後、1992年の「九年制義務教育大綱」において中等教育課程における英語教育を主とした選択外国語が必修化され、2001年には「新教育課程改革」の一貫として初等教育課程での英語教育が始まり、現在では非常に高いレベルの英語教育が実施されている。

## 3. 少数民族区域のディレンマ

中国は55の少数民族が人口の一割を占める多民族国家であり、民族集住地域は区域自治の領域として定められており、全国には5つの民族自治区、30の自治州、120の自治県・旗が置かれている。それぞれの民族区域では宗教的自由や文字・言語使用の自由などが憲法で認められ、民族学校も設置されている。

民族自治区では、1950年代にはじまった「二言語併用教育政策」のもと、民族学校において、漢語と少数民族言語によるバイリンガル教育を実施してきたが、これに加え、2001年からは初等教育課程から英語教

育を導入した。「二言語併用教育政策」の政策的意図は、少数民族言語以外に一つの国語を共有することで国家的統一を図り、少数民族を管理・統制しやすくなることになった。漢語習得は、少数民族自身にとってもメリットが大きく、他の地区との緊密な交流を実現し民族自治区の経済発展を促すものである。英語習得も同様に、民族自治区の発展に寄与するものであり、グローバルな経済社会に参入していくための有用な資格となりうるものである。少数民族にとって実用性の高い言語を身に付けることは社会的上昇のチャンスを得ることなのである。だがその一方、経済的発展が何よりも優先され、実用性の高い言語が重視されるようになると、民族文化・言語の維持は困難になり少数民族は「民族」としての特徴を失っていくことが懸念される。

#### 4. 調査概要

本報告は、従来のモンゴル語・漢語のバイリンガル教育に英語が必修科目として定められるトライリンガル教育体制の下で、母語能力がどのように影響されているかを明らかにし、英語教育の導入によって民族教育に起きる新たな変化を考察することを目的としている。この目的に基づき、2008年3月に内モンゴル自治区の民族学校において言語テストを実施し、民族学校卒業者に対してインタビュー調査を行った。

#### 5. 英語教育導入に伴う問題

現在、英語教員数は十分とは言えずモンゴル族学校の大半は今でも漢語による英語教育を余儀なくされており、農村・草原地帯での英語教育普及は遅れている。教員確保や教材開発といった英語教育のインフラ整備の遅れと共に、学習者にとって問題となっているのは言語教育の過重負担である。

モンゴル族学校では、従来から漢語とモンゴル語の授業が授業総数の3割を占めてきたが、英語教育導入後は更に言語教育偏重傾向が強まり、授業時間数の4割から5割が言語科目になっている。モンゴル族学校の多くは、モンゴル語の授業時間数を減らすことでその他の二言語教育の授業数を確保している現状にある。言語テストとインタビュー調査からは、民族教育の衰退と空洞化が観察され、英語教育の実施がこの結果を更に深刻にさせたことが分かる。そのうえ、民族学校に実施する英語教育は学習者全体に英語リテラシーを普及させるというよりも、むしろ英語での読み書き能力を持つものが実際に優遇され、地域格差と民族内格差を一層広げる結果をもたらしている。

#### 6. 考察

本研究では、新課程改革によって内モンゴルの少数民族学校で実行される英語教育事情と、言語テストとインタビュー調査で明かす民族教育の変化を見てきた。

内モンゴル自治区のモンゴル族学校では、英語習得を通じた経済発展に期待が寄せられている。だが、その一方で自治区におけるモンゴル語の使用範囲の更なる縮小、民族教育離れや民族内格差も起きている。今後モンゴル族学校が地域間格差と民族性維持という民族自治区の二つの課題に応える教育機関として機能するためには、モンゴル語と漢語に加え、英語教育を避けることはできない。その中で、少数民族教育のためにより有効な英語教育およびトライリンガル教育システムを構築するのに、民族性維持に必要となる言語教育の基盤を堅固にしていかなければならない。